

学習適応性に関する研究

三 浦 良 久

小学校 A・B 2 校を選び第 5 学年 149 名を対象に、学習適応性検査と学習意欲診断検査を実施し、それぞれの結果を分析し、学業不振の基本的問題と考えられる学習意欲について、A・B 2 校間ならびに、上・下位群の比較により追求している。学習適応性の高い児童は学習に対して積極的で、耐性、自覚も高いことを明らかにし、さらに高い学習意欲を育てるものは、指導態度や授業の進め方によるのでないかという問題を、次の研究へのアプローチとして提起している。

I はじめに

創造性を育てる教育の重要性が叫ばれてすでに久しい。そしてまた児童生徒の学習に対する自主的、積極的態度の育成についても、最近その重要性が識者によって論じられている。思うに教育の要諦は創造性の開発をはかること、そのものであり、そこに迫るには児童生徒の自主的・積極的学習態度が基礎になっているということについては論をまたない。

近年特に教育に対するさまざまな研究が進み、教育現場においては、授業研究が着々とその実績と効果をあげ、学習指導の方法や過程が急速に改善され、新しい試みがうちだされてきているが、これらの研究実践の基本は、児童生徒のひとりびとりの能力をじゅうぶんに伸長してやることにあり、はたまた児童生徒が自己理解をすすめ、さまざまな困難にうちかって自己実現をはかっていけるように指導援助することにある。

ところで、現実には学習に直面して、自己のもつ能力をじゅうぶん発揮できない児童生徒（学業不振児または学習不適応児）が多く存在している。これは学校教育・学習指導法の反省改善のための重要な課題であると同時に、教師自らの指導観、児童観につながる問題であろう。

さてこのような学業不振や不適応状況になやむ児童生徒は、はたしてどのような問題を抱いているのであろうか。それは単に児童生徒にのみに原因をおしつけておくべき問題であるのか、また教師の教材研究の不足や、指導過程の組み方、児童生徒の思考や論理の把握が不適切なためであるのか等々、いくたの問題が考えられてくる。

学業不振はただ知能に比して学力が向上しないということからだけで放置さるべき問題ではない。学習方法・技術の会得がじゅうぶんなために、その力を発揮できない場合がすくなくない。また、教師や友人との人間関係、また学習集団としての学級社会が、学習の効果をあげるにそぐわないようなふんい気を作っているために、学習能率をあげえないものもある。そしてまた学習に対する積極的な態

度や意欲が乏しいために学業不振になっているものもあろう。

たしかに教師の側からの綿密な指導準備が行なわれたとしても、児童生徒自身が、自分の健康や性格または環境などの障害をのりこえ、学習にたちむかうものがなければ、学習指導の効果はじゅうぶんあがるものではない。

この積極的に学習にたちむかう姿勢を、学習意欲というならば、この学習意欲を高めるための要件のいくつかはまた教師のはたらきかけに帰着するものと考えることができる。

このような考え方をもとに、児童生徒のもつ問題を学習適応性の面からあらい出しながら、学習意欲がどのような構造をもち、どのように関連しているかをとらえ、学習指導の改善の基礎としたい。

Ⅱ 目 的

児童のもつ学習適応性の問題を析出するとともに、学習不適応児の学習意欲の状態を診断的にとらえ学習指導法改善のための基礎的な問題点をはあくする。

Ⅲ 方 法

1 調 査

- (1) 学習適応性検査—AAI—(教研式・改訂) 日本図書文化協会
 (2) 学習意欲診断検査—LMT—(田研式) 田中教育研究所

2 対 象

A小学校	第5学年	男子38名	女子47名	計	85名	(2学級)
B小学校	第5学年	男子33名	女子31名	計	64名	(2学級)
合 計		男子71名	女子78名	計	149名	

Ⅳ 結果と考察

1 学習適応性検査(AAI)の結果と分析

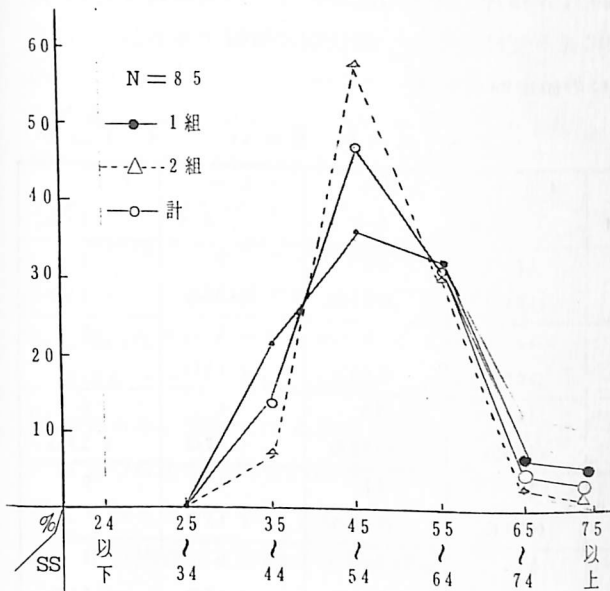
◦AAIの目的

学習者がどのような学習適応性(学習場面における種々の障害をのりこえ、能力相応あるいはそれ以上の学習効果をあげていく傾向)をもっているかどうかをしらべる。

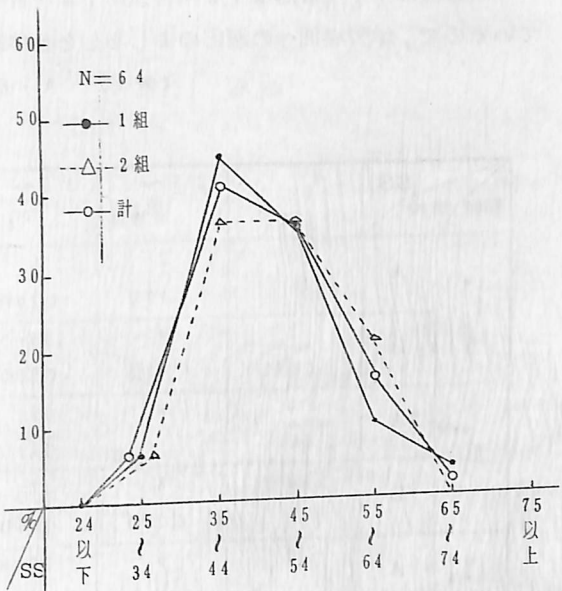
◦検査の構成

領域Ⅰ—学習態度	下位検査	3	テスト項目	各20
領域Ⅱ—学習技術		3	"	"
領域Ⅲ—学習環境		4	"	"
領域Ⅳ—精神・身体の健康		4	"	"

(1) 総点の偏差値分布の比較



(図 1-1) A 校の総点偏差値分布



(図 1-2) B 校の総点偏差値分布

A 校の $M = 52.81$, $SD = 8.48$, B 校の $M = 45.44$, $SD = 8.75$ である。なお両校間の F 検定では $1.036 < 1.49$ ($P = 0.05$) で、有意差がないことが認められ、さらに、t 検定では有意水準 0.05 において、 $5.63 > 1.98$ となり有意差が認められた。

ところで、偏差値による品等段階、下および最下の段階に属するものが、B 校では全体の 6.25% (4 名) あり、A 校では 0% である。同様に、上および最上の段階にいるものは、A 校では 5.87% で 5 名いるのに比べ、B 校では 1.56% (1 名) にしかすぎないことは、注目すべきだろう。なお、中間層ではもっと著しい差が見られることは、B 校のもつ問題について検討を要することを示唆しているといえよう。

なお学級ごとに集計した関係から、そのまま図に示してあるが、各校とも学級間の有意差は認められなかった。

このことから、この検査に表われた差異は現担任教師の指導の問題というよりも、学校間の差そのものであり、すなわち地域の状況やその他の条件によるものと考えられるようであるが、ここでははっきりと結論づけることはできない。

A 校はおちついた小さな市の中心部商店街、住宅地を学区にもつ、比較的経済的に恵まれた地域の学校であり、児童もすなおで落ちついた性格のものが多。

B 校はやや大きな都市の周辺部工業地帯にある学校で、人口動態もわりあいはげしく、主として工場労働者、商店経営が多く、児童は活達であるけれどもやや落ちつきを欠くところが見られる。しかし最近特に、生活指導、教育相談等に力を入れてきた結果、その効果が顕著になってきている。

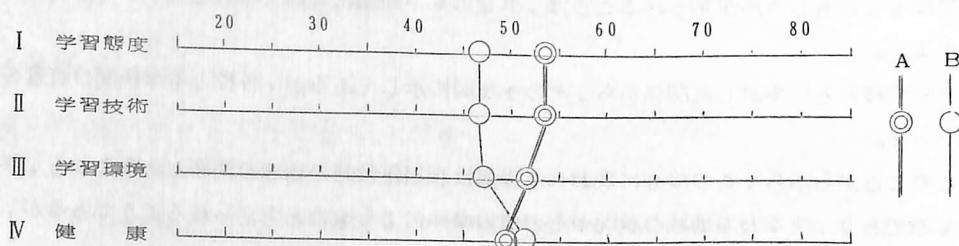
(2) 領域別偏差値における比較

本検査では、Ⅰ学習態度、Ⅱ学習技術、Ⅲ学習環境、Ⅳ精神、身体 の健康の4つの領域にまとめられているので、学習場面への適応のよしあしを全体的に見るだけでなく、領域別に概観できる。

(表1) A・B校の領域別偏差値

N: A = 85 B = 64 () は%

領域 学校	SS	2 4	2 5 ~	3 5 ~	4 5 ~	5 5 ~	6 5 ~	7 5
		以下	3 4	4 4	5 4	6 4	7 4	以上
* Ⅰ	A	0	2 (2.35)	6 (7.05)	42 (49.41)	25 (29.41)	9 (10.58)	1 (1.17)
	B	2 (3.12)	4 (6.25)	19 (29.68)	32 (50.00)	6 (10.93)	1 (1.56)	0
*** Ⅱ	A	0	0	12 (14.11)	34 (40.00)	33 (38.82)	4 (4.70)	2 (2.35)
	B	0	8 (12.50)	17 (26.56)	27 (42.18)	11 (17.18)	1 (1.56)	0
** Ⅲ	A	0	0	16 (18.82)	32 (37.64)	32 (37.46)	4 (4.70)	1 (1.17)
	B	1 (1.56)	2 (3.12)	25 (39.06)	21 (32.81)	15 (23.43)	0	0
Ⅳ	A	1 (1.17)	3 (3.52)	22 (25.88)	31 (36.47)	22 (25.88)	6 (7.05)	0
	B	0	2 (3.12)	22 (34.37)	22 (34.37)	17 (26.56)	1 (1.56)	0

A B 間 * $F = 1.53 > 1.49$ ** $t = 2.71$ *** $t = 5.08$ 

(図2) A・B校領域別プロフィール

表1は領域別の偏差値を段階に分けて整理した。前項で述べたように総点でA・B校間に有意差が認められたが、領域別に比較しても、領域Ⅰ、Ⅱ、Ⅲにおいてかなり大きな有意差が認められた。

これをプロフィールにしてみると、図2のように、はっきりとその差を見ることができる。

以上のことから総合的に言えることは、学校での指導や家庭の問題とかかわりのある面で、B校がA校より劣るということである。

$$N = 85$$
[illegible]

(表3) B校 下位検査得点分析

N = 64

領域 下位検査 得点	I			II			III				IV			
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14
0					1	1								
1	1		1		1									
2					2	1								
3					2	1								
4	1		2	1	3	1		1	2					
5	2	1	3	5	5	5		1	1					
6	2	3	6	2	4	5	3			1	1	2		
7	5	1	7	3	6	6	3	2		4	1	1		
8	3	3	11	7	10	11	3	2	3	3	4	4	2	
9	7	10	11	11	7	13	6	8	5	3	4	4	3	2
10	11	6	8	7	8	7	7	13	7	8	15	11	8	2
11	13	7	6	7	3	6	9	7	8	10	10	6	5	2
12	5	7	7	8	4	4	10	7	11	13	9	9	9	5
13	6	8	1	4	3	1	9	7	8	9	9	10	6	6
14	5	8	1	3	4		6	5	4	4	5	6	6	8
15	1	6		2	1	2	3	5	8	6		4	13	10
16	1	2		3			1	4	3	3	1	4	8	14
17		1					3	2	3		5	2	2	6
18	1	1		1					1			1		5
19							1						1	3
20													1	

(表4) A・B校得点平均

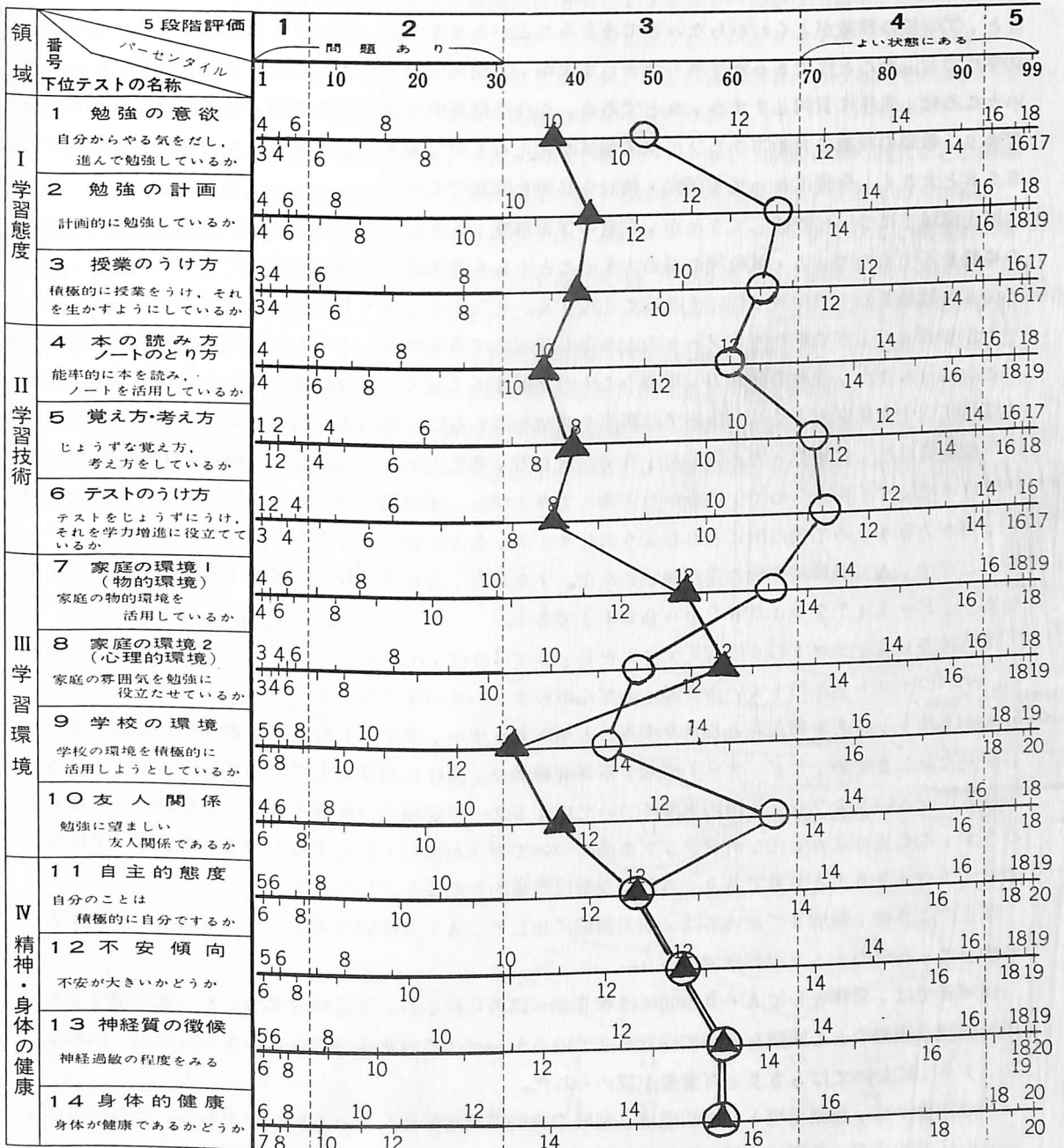
下位検査		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14
A校	M	12.05	13.15	11.23	12.56	10.93	10.72	13.44	11.20	13.33	13.32	12.47	12.04	12.91	14.67
	SD	2.53	2.47	2.31	2.69	2.81	2.85	2.65	2.85	3.28	2.60	2.73	2.92	3.11	2.83
B校	M	10.29	11.53	8.64	10.16	8.25	8.41	11.53	11.50	12.02	11.59	11.52	11.89	13.19	14.58
	SD	2.93	2.86	2.45	3.07	3.41	2.75	2.82	2.78	2.96	2.40	2.46	2.70	2.63	3.00
F		1.35	1.35	1.13	1.31	1.48	1.07	1.13	1.04	1.22	1.17	1.23	1.16	1.39	1.13
T		*** 3.89	*** 3.69	*** 3.59	*** 3.07	*** 3.08	*** 4.96	*** 4.20	0.65	** 2.57	*** 4.12	* 2.20	0.31	0.58	0.19

$\bullet\bullet\bullet P < 0.05$
 * $P < 0.05$
 ** $P < 0.01$
 *** $P < 0.001$

表2, 3, 4, が示すように, 領域I, IIの全下位検査について, かなりの差が認められる。III領域では, 7, 10において差が大きく, 9でも $t = 2.57$ で有意差が認められる。IV領域の11では, $t = 2.20$, で有意差が認められる。下位検査で有意差のなかったものは, 8—家庭の環境2(心理的環境)と, 12—不安傾向, 13—神経質の徴候, 14—身体的健康である。

下位検査1は勉強の意欲(自分からやる気を出し, 進んで勉強しているか)である。質問項目の主なもの(全体で10問)は, ㊦人にいわれなくても自分から進んで勉強しますか。㊧勉強しなくてはと思ひながら, なかなか気のりのしないことがありますか。㊨勉強しようと机に向ったとき, すぐにとりかかれますか。㊩勉強するために机に向っても, すぐいやになってしまいますか。㊪勉強中にもの思いにふけるとか, ぼんやりするとかして時間をつぶすことがありますか, などである。

下位検査2は勉強の計画（計画的に勉強しているか）である。ここでは、主として勉強時間の計画についての質問をしている。㊦家で勉強するとき何時から何時まで何を勉強するか決めていますか。㊧勉強の計画は守っていますか。㊨テレビを見すぎたり、友だちと遊びすぎたりして、勉強の時間がなくな



(図3) 下位検査プロフィール

—○—A校 —▲—B校

平均点小数点以下四捨五入

ることがあります、などがあげられている。

下位検査3は、授業のうけ方(積極的に授業をうけ、それを生かすようにしているか)である。これは、特に教師の授業のすすめ方にも大きく関係することで、興味ある項目である。主な質問項目を掲げると、㊦学校の授業がよくわからないのであきることがありますか、㊧いつも予習をしていますか、㊨学校で習ったことはできるだけ早く復習しますか、㊩授業中先生の質問に進んで答えたり、わからないところは、先生に質問しますか、などである。これは授業中の児童の主体的、積極的態度を示すものであり、教師の授業の進め方ならびに授業態度が伺えるものである。この項目のA・B校の有意差は、6.58と大きく、今後においても研究・検討を必要問題であらう。

以上領域Ⅰについて概観してきたが、児童の学習態度、とりわけ学習意欲や授業に対する取り組み方の姿勢を示すもので、A・B校間の差の大きいことから興味深い問題を提供してくれている。

つぎに領域Ⅱの下位検査についてみることにする。ここでも、A・B校間の差が大きい。

下位検査4は、本の読み方、ノートのとおり方(能率的に本を読み、ノートを活用しているか)である。

この項目もまた、授業の進め方、指導のこまかな配慮によって、学習技術を高めることができ、児童の学習に対する能率をよくし、ひいては興味や意欲を高めるのに関係するだけいじめなのであると考える。

下位検査5は、覚え方・考え方(じょうずな覚え方、考え方をしているか)である。㊦問題が解けないときには、すぐあきらめず、いろいろと考えてみますか。㊧問題が解けたときにも、必ずそれを検討し、解き方をまとめて頭の中に入れるようにしますか、などが質問項目として掲げられている。

ここでは、A・B校に分散の差が検定された。すなわち、A校の $SD=2.81$ 、B校の $SD=3.41$ であり、 $F=1.477 > 1.78$ ($p=0.01$)である。

下位検査6は、テストのうけ方(テストをじょうずにうけ、それを学力増進に役立てているか)である。㊦いつテストされてもよいように、ふだんからまとめていますか、㊧テストのとき問題の意味をとりちがえたり、答えを書きおとしたりすることがありますか、㊨テストの答案を書き終わったときには必ず見なおしますか、など、テストに対する準備態勢や、受ける態度などについて質問している。なおテスト不安というような、不適応現象については、12-不安傾向の検査と並行して解釈できる面もあるが、ここでは主として、ポジティブな面について明らかにしようとするものである。A・B校間の差は、 $t=4.961$ と有意であり、A校の児童は積極的な態度を示している。

以上のように、領域Ⅱにおいては、他の領域に比して、A・B校間の差が大きく、領域Ⅰの結果とあいまって、指導のくふうが必要であらう。

領域Ⅲでは、全体としてA・B校間には有意差が認められるが、下位検査では、8-家庭環境2(心理的環境)家庭のふん囲気を勉強に役立たせているか—だけに有意差が認められなかったが、他の7、9、10、においてははっきりと有意差が認められた。

下位検査7は、家庭環境1(物的環境)家庭の物的環境を活用しているか—である。この項目は、家庭の経済的状況、教育への関心度等の影響が考えられるもので、例えば㊦家では勉強する場所がきまっていますか、㊧家では勉強机をもっていますか、㊨暑さや寒さを防ぐため、家でいろいろくふうして勉強しますか、などがある。また、児童自身の態度などをみるものとして、㊩家で勉強するとき、目を

つかれさせないように、しせいやあかりに気をつけていますか、㊸家の勉強べやや机の上には、いろいろのものをはりつけたり、置いたりしていますか、などである。

下位検査 9 は、学校的环境 (学校的环境を積極的に活用しようとしているか) である。ここでは、㊹毎日学校へ行くのが楽しいですか、㊺先生にきらわれていると思うことがありますか、㊻教室のなかがさわがしいので、落ちついて勉強できないことがありますか、などが質問項目にあげられている。いずれも物的な環境条件でなく、人的環境に対する反応傾向をみるものである。

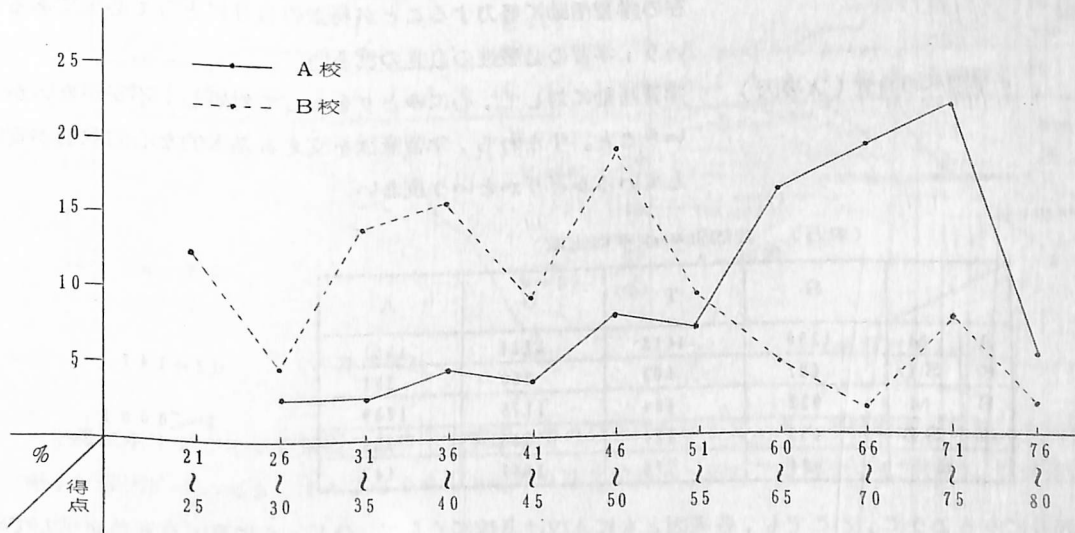
下位検査 10 は、友人関係 (勉強に望ましい友人関係であるか) であり、学級のふん囲気などに関連して、児童の学習生活を支えるものとして、友人関係に対する不安傾向をみようとするものである。

以上、領域Ⅲにおける、7, 9, 10 の下位検査では、A 校はいずれでも高い値を示し、環境的にも恵まれ、落ちついて、不安なく学習に取り組んでいるといえる。ただ、8 では、有意差がないけれども平均だけから見ると、A 校は B 校より低い値を示していることが、他の下位検査のほとんどの傾向と反して気になることである。ただ、下位検査 13 神経質的傾向でも同じ傾向であることから考えてみるとうなずけるような気もするが、今後の研究によらなければならないものと考ええる。

領域Ⅳでは、下位検査 11 自主的態度において有意差が認められる他はほとんど差がない。自主的態度において、A 校に有意差が認められるということは、領域Ⅰ, Ⅱの結果と符号させて考えてみると、当然のように思われる。

2. 学習意欲診断検査 (LMT) の結果と分析

(1) 学習意欲得点 (LM_s) 分布



(図4) LM_s 分布の比較

A 校 N = 85 M = 59.79 SD = 12.36

t = 7.239

df = 147

B 校 N = 64 M = 42.42 SD = 13.12

p = 0.001

学習適応性検査においても、A・B校の間に有意差が認められ、A校の児童がかなり高い学習適応度を示していたが、つぎにこの学習意欲診断検査においても、非常にはっきりとした有意差が認められ、A校の児童が学習に意欲的に取り組んでいるということがみられる。

この検査は、児童生徒の学習意欲の現状を診断的にとらえ、その学習意欲の構造を具体的にとらえようとするものである。

いかに教師が熱心に周到な学習指導を行なっても、児童生徒の側に学習しようという意欲がなければ充実した学習活動は起ってこないから、学習指導の効果があがらないということは当然のことであろう。しかしそれと同時に、教師の指導のいかんによって、ある程度、学習態度や耐性、自覚などを変容せしめ、高めていくことができるということも、あながち独善的な判断とはなるまいと考える。このような考えから、以下の考察をすすめていこうと思う。

(2) 要因別得点比較

要因にはつぎのものがあげられている

- 学習への態度(S要因)——積極的に学習活動を展開しようとして精神的エネルギーを集中している度あい
- 学習への耐性(T要因)——一度学習活動を展開したならば、それに伴う困難さを乗り越えて学習目標に到達するまで続けること、一困難性に耐えぬくねばり強さをもって学習活動を継続すること
- 学習への自覚(N要因)——学習目標に到達しようとして自ら選択し、意図し決断して学習活動に向かう、いわゆる自主性を支えているものとして重要な、現在の学習活動に努力することが将来の自分にとって必要であるという、学習の必要性の自覚の度あい
- 学習への自覚(A要因)——学習活動に対して、心にゆとりをもって対処し、不安がないかということ。すなわち、学習意欲を支える基本的な心的状態が安定しているかどうかという度あい

(表5) 要因別得点平均比較

		S	T	N	A
A校	M	13.56	14.18	17.14	15.51
	SD	4.07	4.02	2.60	3.51
B校	M	9.22	8.84	11.75	12.89
	SD	4.33	4.24	3.65	3.59
t		6.24	7.78	10.47	4.43

df=147

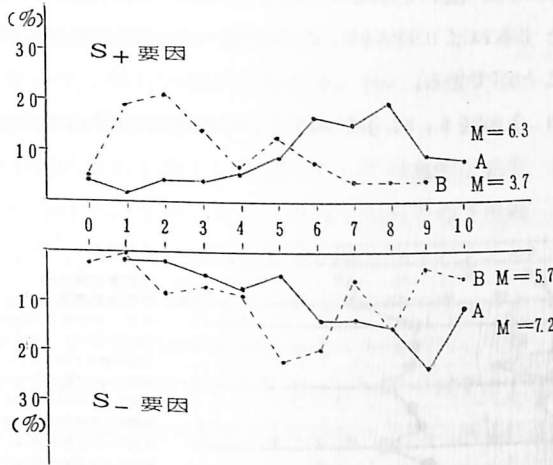
$P < 0.001$

表5にみるように、ここでも、各要因ともにA校はB校にくらべ、ひじょうに高い有意差を示している。とくに、N要因では最も高く、Mで5.39、SDで1.05の差がある。

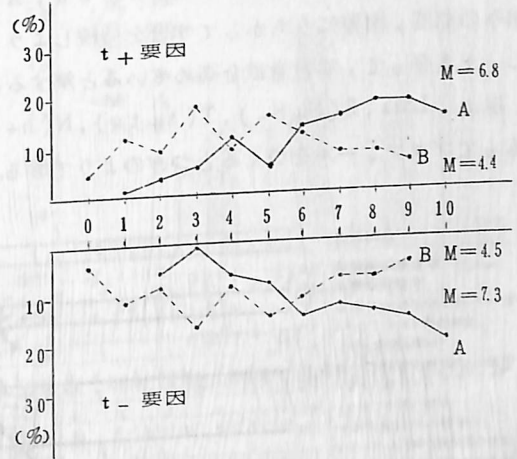
N要因は、S要因やT要因を支えている動機づけが、自律的なものであるか、他律的なものであるかを吟味して、真に根強い本物の学習意欲であるかどうかを示すものであるといえるから、A校の児童の

学習意欲は、LMSにも示されているように 全体として高いといえよう。

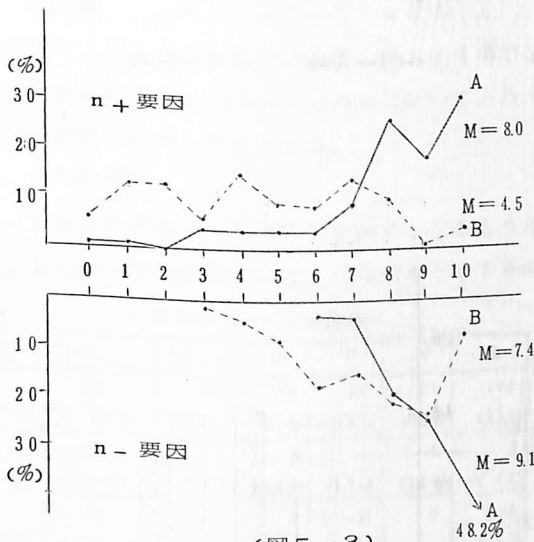
(3) 下位要因別得点比較



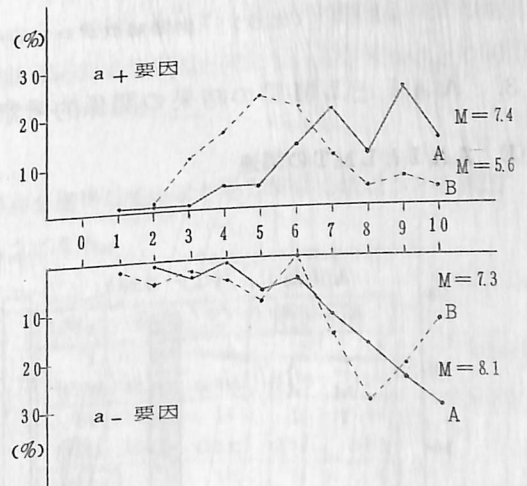
(図5-1)



(図5-2)



(図5-3)



(図5-4)

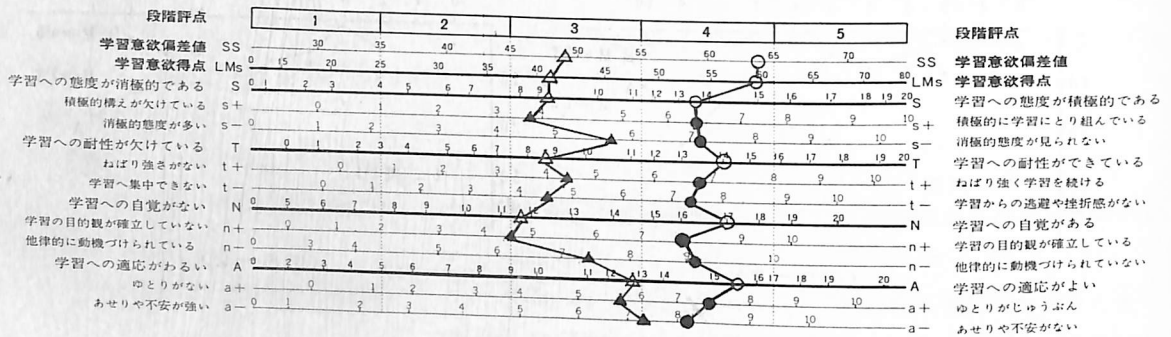
上図に示すように、各要因ごとの下位要因の得点分布においても、A・B校の差があり、t検定の結果、a-要因においても $t = 2.386$ ($p < 0.02$) であり、他の下位要因でも同様に、有意差が認められた。

特に差の大きいものは $n+$ 、 $n-$ 要因である。 $n+$ は、学習への自覚の自律性、すなわち積極的に学習に対して必要性を認識しているかどうかを示す。得点が高いということは、学習の目的観が確立していることである。 $n-$ は、学習への自覚の他律性、すなわち学習そのものを目的とするよりも、他律的に動

機づけられて手段視しているかどうかを示す。得点が低いものは、他律的に動機づけられて学習意欲を示しているにすぎないものである。

S+S-要因, t+t-要因の結果においても, A校は高い値を示しているが, 学習への積極的な取り組みの態度, 困難にうちかって学習を持続しようとするねばり強さは, この学習への自覚と密接に関連し, 支え合って, 学習意欲を高めていると解することができる。

以上, LMs, S(S+S-), T(t+t-), N(n+n-), A(a+a-)について, それぞれの得点平均値をもってプロフィールをつくるとつぎのようである。

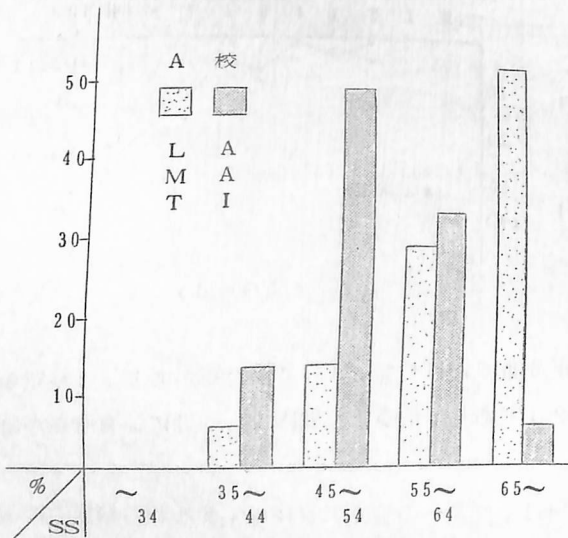


(図6) 学習意欲プロフィール

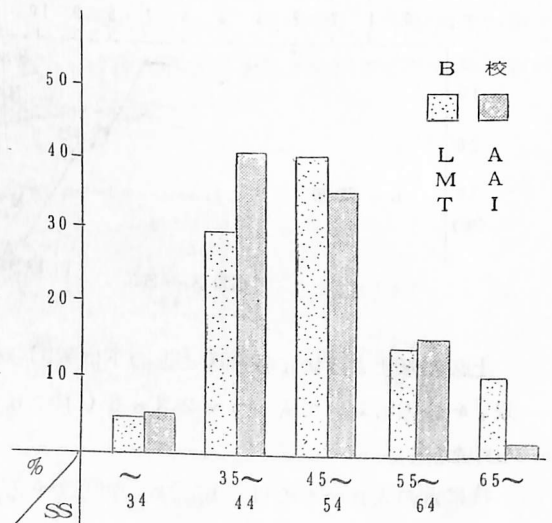
—○— A校 —△— B校

3. AAIとLMTの結果の关系的考察

(1) AAIとLMTの関連



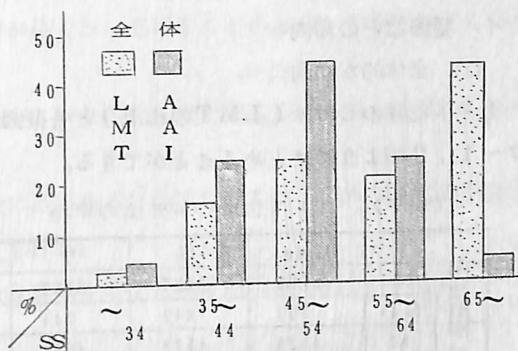
(図7-1) AAIとLMTの偏差値分布



(図7-2)

学校別ならびに全体の傾向を偏差値の段階別分布により比べると、図7-1, 2, 3のようになる。

いずれも同じような傾向を示しているといえるが、A校では、偏差値45~54, 65以上の二つの段階において、著しい差が見られる。前にも述べてきたように、A校児童のAAIにおけるI, II領域の得点が他に比して高く、学習に対して積極的な態度を身につけていたが、このことは、LMTの下位検査S, T, N要因においても高い値を示すことになる。これと比較して、B校児童においては、AAIのI, II領域で低い値を示し、学習に対して積極的な意欲がやや低いと考えられたが、LMTによる学習意欲、特に積極的な態度、耐性、自覚要因においてもそれほど高い値を示さなかったものと解される。



(図7-3)

極的な意欲がやや低いと考えられたが、LMTによる学習意欲、特に積極的な態度、耐性、自覚要因においてもそれほど高い値を示さなかったものと解される。

(2) AAI上位群・下位群のLMTの傾向

上位群 偏差値 55以上 43名 (A・B校全体で)

下位群 " 44以下 42名 (")

偏差値により上のように調査対象人員149名のうちから、抽出した。この上・下位群のLMTの結果の傾向を考察することにより、前項においてふれた学習適応性の主要因と考えられる学習意欲との関係について明らかにしようとする。

ア. 傾向の概観

上・下位群の成員が、LMTにおいて、どのような得点を獲得しているかをLMs(総点)と各要因別に、上・中・下の段階に分けてしらべると、下表のようになる。

(表6-1) 上位群

	LMs	S	T	N	A
上位	39	35	38	34	40
SS55以下	(90.6)	(81.4)	(88.3)	(79.7)	(93.0)
中位	4	8	5	9	2
SS45~54	(9.3)	(11.6)	(11.6)	(20.9)	(4.7)
下位	0	0	0	0	1
SS44以下					(2.3)

N=43 (%)

(表6-2) 下位群

LMs	S	T	N	A
5	9	8	7	17
(11.9)	(21.4)	(19.0)	(16.7)	(40.5)
16	11	14	11	17
(38.1)	(26.2)	(33.4)	(26.2)	(40.5)
21	22	20	24	8
(50.0)	(52.4)	(47.6)	(57.2)	(19.0)

N=42 (%)

上位群では、どの項目においても、80%ほどが上位(SS55以上)を占めている。すなわち、学習適応性の高いものは、学習意欲診断検査においても高い得点を得ており、両検査の相関が高いことを示す。

下位群においては、上位群とやや異なり、学習適応性が低くとも、学習意欲診断検査の得点が高いものがかなりいることがわかる。

例えば、B校のK児(女)はAAIではSS35であるが、LMs69, S=72, T=61, N

= 62, A = 68 という傾向を示している。これはテスト実施上の問題, 心身の状態のちがいなどの他の要因も考えられるけれども, 今後における事例研究によって明らかにしなければならない問題である。

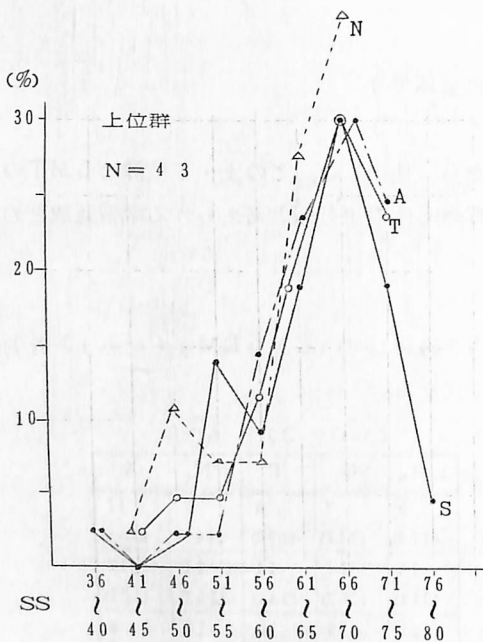
イ 要因ごとの傾向

(ア) 全体的な傾向

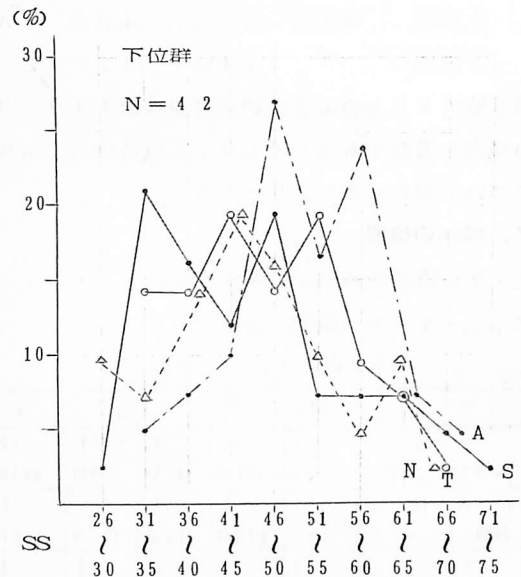
上・下位群のLMs (LMTの総点) と各要因ごとの偏差値の平均とその分布のようすを, 表9, 図7-1, 2のようにとまとめることができる。

(表7) 上・下位群の偏差値の平均

		LMs	S	T	N	A
上位群	M	67.06	64.27	64.62	61.95	64.16
	SD	8.01	8.42	7.44	7.35	7.76
下位群	M	45.26	45.73	46.92	44.42	51.33
	SD	9.46	11.45	9.48	10.70	8.49



(図8-1) 要因別偏差値分布



(図8-2) 要因別偏差値分布

図8は上・下位群の要因別偏差値の分布状況を示すものである。上位群はS, T, N, Aの各要因とも, ほとんど同じような分散である。ただN要因がSS66~70において44.19% (19名) と高い値を示しているが, これは, その上の段階にだれもいないことからみて, 当然である。しかし, 他のS, T, Aの要因ではSS71以上のものがあるのに, N要因にないことは, 検討しなければならないであろう。

上位群の, このようなまとまった傾向と比べて, 下位群の傾向は, かなり各要因ごとの分散にかなり

の差がみられる。

特に S・T 要因では左辺が高いことは、学習に対する積極性が低く、またねばり強くやりぬく耐性の低さを如実に示している。同じように、N 要因も左辺が高くなっていることから、学習に対する自覚が乏しいものが多いことを示している。

これとは逆に A 要因については、右辺が高く、適応がよいという傾向を示しているが、この点については、後で述べることにする。

なお前述したように、下位群における各要因の分散に差があることについては、個々の児童の得点状況をしらべてみて、おおよそつぎのようなことが考えられる。

- ・ A A I の成績が下位に属していても、L M s がかなり高いもの、また上位の属するものがあるということ。なおこのような傾向は、A 校の児童に多い。
- ・ A A I の成績が下位でも、平常の学習状態がわりあい活発であり、学習成績もよいものがあるということ。
- ・ 個々の児童の反応が、まことに種々さまざまであり、このことから考えてみると、下位群の児童のいわゆる不適応の原因はかなり複雑であり、またまことにいろいろな条件に微妙に影響されているように考えられる。

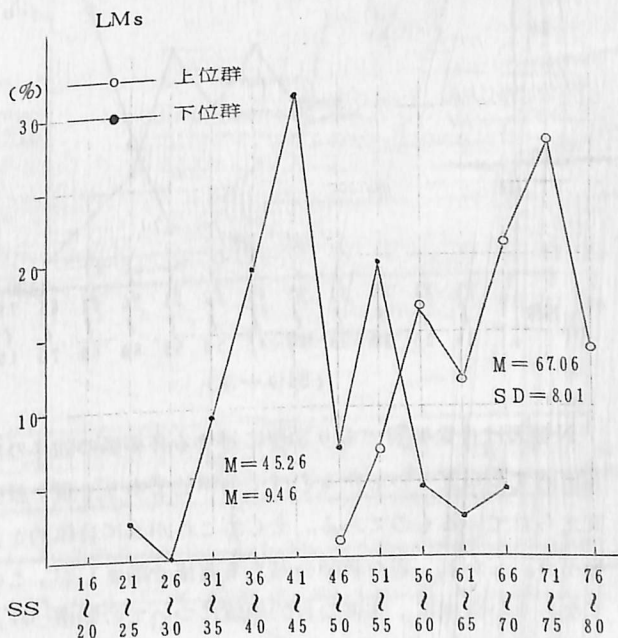
(イ) 要因別比較

上述してきたように上・下位群にそれぞれ特徴が発見されたが、さらに各要因ごとに比較してみることにする。図 9-2, 3, 4, 5 は、要因別の上・下位群の偏差値分布である。

図 9-1 は L M s の偏差値の分布である。

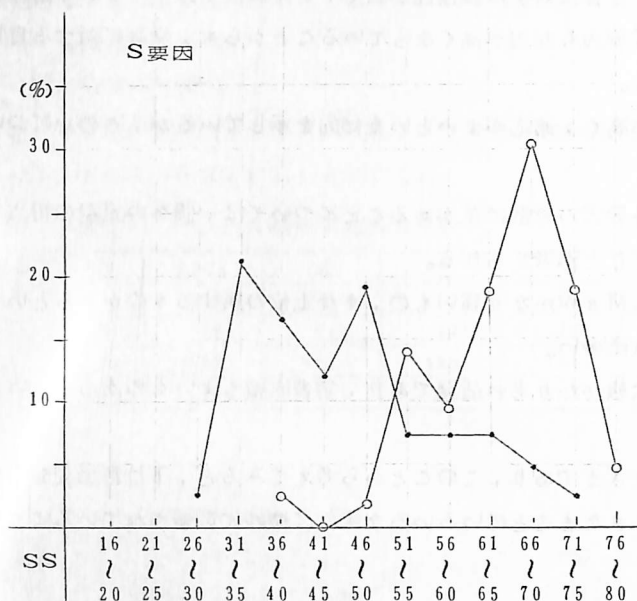
この図で考えられることは、二つの曲線が交錯している、SS 46~70 の間に位置する、下位群の児童の問題である。A A I の成績も低く、L M s も低いという児童は、もちろんそれなりに多くの問題をもっているのであるが、A A I の成績は低くとも、L M s が高いという児童は、学習に対して積極的にたちむかい、ねばり強くがんばっているこうとしている反面、学習に対して一種の焦燥感をいだいているものであるとも考えると、学習指導においてだけでなく、生活面でもその指導に留意すべきであると思う。

このような児童は、約 38% もある

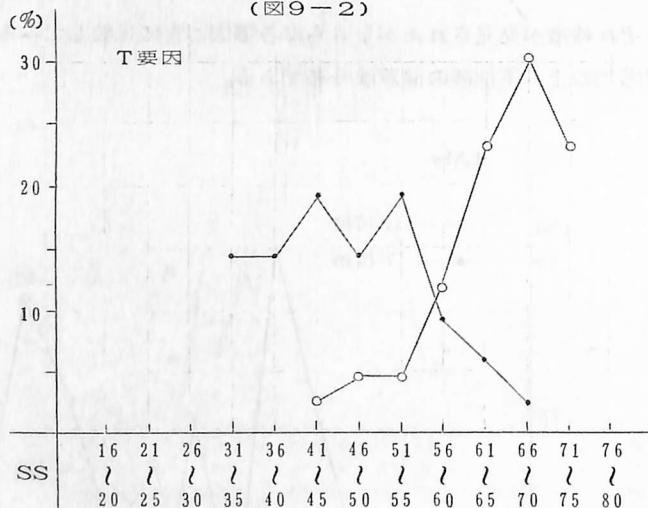


(図 9-1)

ことから考え合わせると今後の研究にまつことが大である。



(図9-2)



(図9-3)

○ S 要因

S 要因は積極的に学習活動を展開しようとする精神的エネルギーの集中度であるが、やはり上位群は非常に高い値を示すものが多い。

ところが、この中でも上位群としては低いと考えられる S S 5 5 以下のものが約 18 % (8 名) いる。同様にして、下位群の中に S S 5 1 以上のものが約 28 % (12 名) も存在しており特に S S 7 1 の児童が 1 名いるが、前にもふれた、K 児である。この児童のほかにもいる、下位群のなかの高 S 要因児について検討する必要がある。

○ T 要因

T 要因は耐性の度あいである。

ここでは、S 要因の分布と比べて、上・下位群との間にはっきりとした格差があり、区別できる。すなわち曲線の交錯範囲にいる下位群の児童が、8 名である。同様に、上位群の中でも比較的低い値を示すものが 5 名ほどあり、このことから、耐性については、上位群は高く、下位群は低いという傾向がはっきりと見えるといえる。

○ N 要因

つぎのページに示す図 9-4 が比較図である。

N 要因は自覚要因であり学習に対する必要感の強さの度あいである。一般的にいて小学校児童の学習に対する自覚といったものは、他律的であり、親や教師の賞揚や励ましによって、しぜんに形成され支えられているものである。そしてこれが真に自律的な自覚にまで高まるということはなかなか困難であろう。しかし、親や教師の与える賞揚や励ましが、この発達段階の児童に対して適切であり、強制的にならない程度に、学習の目的価値についての動機づけがなされるならば、児童は児童なりに、困難に耐えて勉強しようとする精神的エネルギーの発現を刺激され、これを支えるものとしての「自覚」が形

成されよう。

このように考えてくると、ここに表われたものは、上・下位群ともにまだまだ不安定なものであろうけれども、上位群のほとんどと、下位群の一部にかなり高い自覚をもっているものがあるといえる。下位群には、教師に言われるから勉強するといった傾向のものが多いが、他の要因の傾向と考え合わせると、学習に対する興味や関心を高めてやるような基本的初歩的な指導が必要であると考えられる。なお下位群中で高い値を示している数名がある学級に偏っていたことは興味深い。

○ A 要因

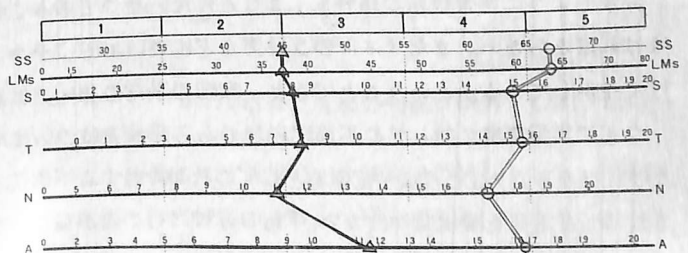
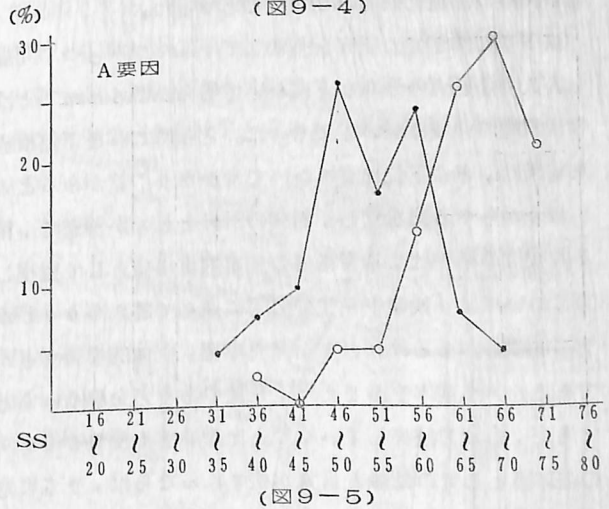
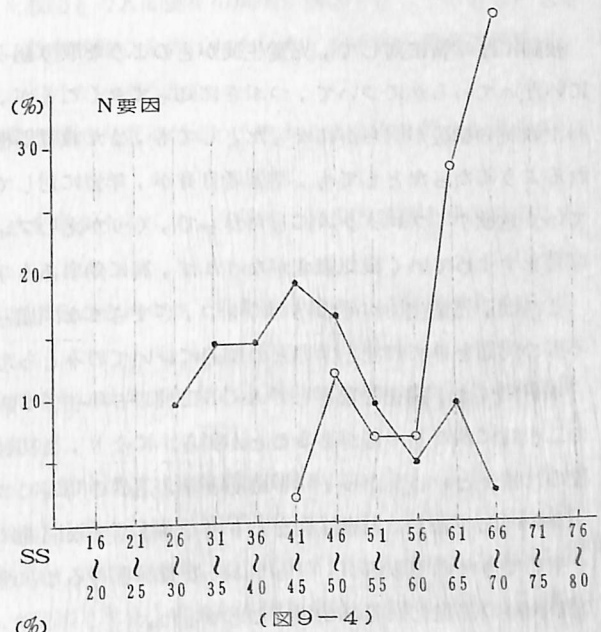
A 要因は心にゆとりをもち、不安や焦燥感がないかどうかをみるものである。A A I 検査によって測られたものと、この要因における成績とは、他とくらべて、上・下位群は接近しているといえる。

A A I は、学習態度、学習技術、学習環境、精神・身体 の健康という 4 つの領域から、その適応度をしらべたものであり、この下位検査の個々の成績と A 要因の成績との対比的な検討が必要であるのであるが、今後の問題としたい。

以上各要因ごとに上・下位群の比較をこころみてきたが、学習に不適応を示している児童はまた学習に対して積極的態度に欠け、ねばり強さや自覚が低いことを知ることができた。

これをプロファイルにすると図 10 のようになる。

＝○＝ 上位群 —△— 下位群



(図 10) 学習意欲プロフィール

V ま と め

教師には学習に対して、児童生徒がどのような取り組み方をしているか、またどのような問題を奥底にいただいているかについて、つぶさに知っておくことが、たいせつなことである。教材研究が進み、教科や教材の構造が明らかになったとしても、また教育器械の開発が進み、指導の場にじゅうぶん生かされるようになったとしても、学習者自身が、学習に対して積極的にたちむかい、問題を解決しようとしていく意欲や、プログラムにしたがって、くりかえしフィードバックしたり、注意深く情報に対処して、学習をすすめていく根気強さがなければ、真に効率ある学習は成立しえない。

これは、児童生徒がその内面にもつ、さまざまな問題と強くかかわり合っているものであって、学業不振の問題を単に知能と学力との関連においてのみとらえることで済ませることではない。

本研究では、調査対象としてA・B二校の5年生各2組を選んだが、今までに述べてきたように、この二校間にかなりの差があることが明らかになり、当初計画したものとやや趣きをことにして、A・B校の比較をとおしながら、学習適応と学習意欲の問題について論考を進めることにした。

なお研究の途上、児童生徒をとりまくさまざまな問題について明らかにしなければならないことが多く生じてきたのであるが、じゅうぶんな資料を得ることができず、結果として次の研究のための仮説設定のための基礎的研究の範囲にとどまった。

以下、これまでの研究を整理して、ふたつみつつ、問題の所在への推論を試みようと思う。

AAIの総点の分布などにおいて明らかにされたことは、A・B校間の差は、学習態度、学習技術、学習環境の領域においてであった。さらにこれを下位検査ごとについて、テスト項目ごとにしらべてみた結果は、どの下位検査においてもかなりの差があるということである。

自分からやる気をだし、勉強の計画をしっかり立て、積極的に授業をうけているかということにおける両校間の格差は、学習指導の基本的な事項として重視しなくてはならないであろう。特に授業のうけ方については「授業中先生の質問に進んで答えたり、わからないところは先生に質問しますか」というテスト項目があるけれども、発見学習、主体的学習などが叫ばれている今日、児童生徒が学習の主体者であるという基本をふまえた、授業のあり方をもういちど考えなおし、児童生徒が自分で計画し、自分で考え、自分で解決していくことを援助する授業こそがたいせつであろう。このように児童生徒に学習の主体者としての認識と自覚が生まれるならば、まさに意欲的に学習にとりくむ姿がそこに具現してくるものと考えらる。

おなじように学習技術の指導も、まことにたいせつであり、特にノート指導の重要性を改めて認識しなければならない。またテストのうけ方などについても、テストの結果をどのように次の学習に結びつけて生かしているかということであり、教師の平常の扱い方に影響されることが多いことである。

つぎに学習環境に対しての不応現象のあらわれ方について考えると、特に下位検査9の結果を重視しなければならない。これは学校環境としての教師に対する不応状況を示すものである。児童生徒にとって教師ほど重要な環境条件はない。「毎日学校に行くのが楽しいか」「先生にきらわれていると思うか」などといったテスト項目から考えて、対教師との人間関係、そして学級・学校のふんい気などは児童生

徒が学校が楽しいと感ずるだいな条件であろう。最近登校拒否児が多くなっているが、この原因はさまざまであり複雑であるけれども、すくなくとも教師との人間関係の問題が誘因となっていることから、学習指導、生活指導、学級指導等、教育活動の全面にわたって、受容的な教師の態度が、学習適応性を増し、学習意欲を高めるといえるのではないだろうか。

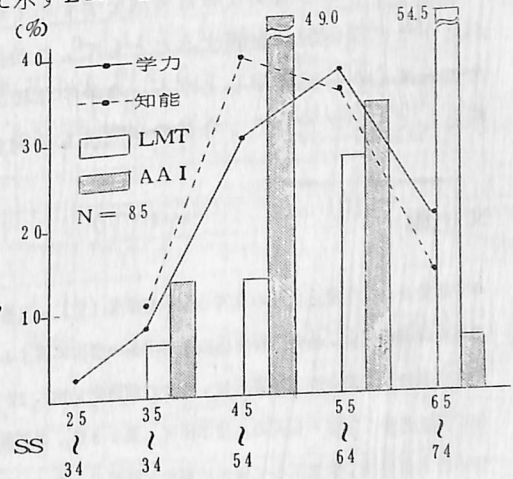
LMTの結果も、AAIと同じように、A・B校間に有意差が認められたことがらを総合してみても、つぎのようなことが言えるであろう。

1. 学習への適応性を高め、学習意欲を増進するには、主体的、発見的学習をすすめることが効果的である。
2. 教師が受容的態度で児童生徒に接することにより、能動的、意欲的に学習がすすめられる。
3. ノートのとり方、活用のし方の指導や、テスト結果の効果的な活用をはかることにより学習効率を高めることができる。

なおつづいて、LMTの結果ならびにAAIとの関係について考察してきたが、AAIに低い値を示しているものは、やはりLMs(LMTの総得点)も低く、A・B校間にもはっきりとした差があることが確認された。もちろん、AAIの下位検査にも、学習意欲についてのものがあるのであるが、LMTの要因別、ならびに下位要因の各項にわたって比較しても、積極的態度、耐性、自覚についていずれもA校が高い値を示しているということから考えて、学習意欲が高いということは、学習適応性も高く、学習効果もよりあがっているといえよう。対象児童全員の資料を得ることはできなかったのであるが、参考までにA校の知能と学力の偏差値と本文の図7-1に示すLMTとAAIの偏差値をあわせると、下図のようになる。これだけでは早計には結論づけられないが、学習によく適応していると意欲が高く、学力も高いということがうかがい知ることができる。

AAI上・下位群のLMTの要因ごとの比較においても、上位群はS、T、N要因で下位群と大きくひらいていているという結果からも、学習適応性が高いことは、学習意欲に大きく影響し、逆に積極的な意欲は、耐性を高め、適応性をも高めるといえるようである。

4. 学習への自覚、耐性を高めるならば、学習意欲も強まり、学習適応性も高くなる。
5. 学習に意欲的に取り組ませるならば、学習効率が高まり、学力を向上できる。



(参考) A校の知能・学力・LMT・AAI

以上この研究のまとめとしての5項目は、すでに識者によって述べられている自明の理であるが、今後、具体的に学習指導、学級指導の場をとおり、実験的に、実践的に研究をすすめることにより、児童生徒の態度変容の過程を、明らかにしなければならないと考えている。

VI お わ り に

ひとりでも多くの児童生徒が、学習にうまく適応し、意欲的に学習に取り組み、自己のもつ力をじゅうぶんのばしきれるような教育のあり方をつねに願っている。

子どもたちを取りまく社会がますます複雑化し、多様化し、人間疎外の状況が多くなっている今日、児童生徒にふりかかる不安の原因もまた多くなっている。

また教育の場においても、教育機器などが導入されはじめ、教育効果を高めようとする努力がはらわれているが、しかしこのような教育が進めば進むほど、児童生徒の不適応現象が多くなることが危惧される。

ともあれ、学習は学習者の個々において成立しなければならないものであるから、ひとりひとりが、主体的に積極的に、学習という目的価値に向って努力することなしには、真のものにはならない。他からはたらきかけをただ受動的に受けとめるのではなく、自律的におしすすめられるものでなければならぬであろう。創造性もまたこのような学習意欲や耐性、自律性に支えられてなるものであり、教育の古くして新しい課題である。

このような考えからすすめられた研究ではあったが、計画の下手ぎわから、じゅうぶんな結果を導くことができなかった。さいわい、最近各地でAAIやLMTが地域ぐるみで行なわれるようなところもあり、今後広範囲にわたってよりよい資料の交換や、さまざまな問題の教示をいただけるものと期待している。

最後に、日ごろ着実な教育実践をすすめておられる、A・B小学校、C中学校の校長ならびに職員のかたがたに深い敬意を表するとともに、この拙論のために貴重な時間と資料をころよく提供いただいたことに心から感謝申し上げる。なお中学校の資料は直接的には本稿に掲載されてはいないが、基礎資料として大いに役立ち、今後の研究にも活用していきたいと考えている。

文 献

今井欣悦ほか：学業不振児の教育心理学的研究(Ⅲ)，日教心第10回大会発表論文集，1969

滋賀県教育研究所：高等学校生徒の学力不振の要因に関する研究，滋賀県教育研究所研究紀要第11集1969

鈴木正章ほか：創造性と学業不振，教育心理研究，NO.22・明治図書・1971，p.21-26.

田中博正ほか：学業不振児の心理学研究，第23集，野間教育研究所紀要，講談社・1965.

田中教育研究所：学業不振児研究の概要と問題点，教育心理研究，NO.22・明治図書，1971，p.5-74.

新潟県立教育センター：学習適応に関する研究(Ⅰ)，新潟県立教育センター研究集録，第2集・1969.

“ ” (Ⅱ)， “ ” ，第3集・1970.